

作曲部門 Composition  
開催日＝10月27日

取材・文＝伊藤制子  
Text＝Saiho Ito

今年の作曲部門は室内楽がテーマで、応募は76作。2度の譜面審査を経て選出された7作品が本選に進んだ。数年前から、譜面審査の点数は加算されず、選出作品が演奏でのみ審査されることになった。そのため、演奏のできが以前にもまして重要になってくるが、板倉康明指揮の東京シンフォニエッタは、作風の異なる7作を的確に表現しており、演奏水準はかなり高かったと思われる。

最初に演奏されたのは藪田翔一（1983年生）の《EDGE》。編成はヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロという弦楽四重奏で、鋭さや端を意味するタイトルから連想されるように、細かく動くモチーフと間によって、時間に鋭いくさびを打つかのような緊張感のある音楽が展開される。すでに日本音楽コンクールでは2度の入賞歴があり、緻密に音楽を構成する力のある若手である。今回の作品も音響のおもしろさが随所に感じられた。



第1位 魚路恭子

- 〈明治安田賞〉
- 魚路恭子（作曲）
- 〈E・ナカミチ賞〉
- 日橋辰朗（hrm）
- 〈コンクール委員会特別賞〉
- 該当なし

年生）の《Tyrasaurus》は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロがそれぞれ2名という編成。全曲を通じて、グリッサンドが用いられる。チェロのひそやかな音響で始まり、うねるようなグリッサンドが各パートで受け継がれ、渦巻くような音色や点描的な色彩など、多彩な響きの実験が展開される。

3番目に演奏されたのは、白藤惇一（1981年生）の《Parallel Cycle Junction》。オーボエ、ファゴット、トランペット、トロンボーン、チェロという編成で、異質な素材がパッチワークのようにつぎはぎされ、音楽がまるで自在に伸縮していくかのように漸次的に変化していくのが特徴である。金管のモチイ



第2位 藪田翔一

ーフの組み合わせに妙味があるように思われた。

前半最後の曲となった江原大介（1982年生）の《次元の巡り手》は、ヴァイオリン、サクソフーン、チェレスタ、打楽器、箏、笙という和楽器を含む編成だった。箏と笙の音響が効果的に用いられ、緩急のある音楽の時間の流れもうまく構成されており、全体に洗練された書法を感じられる作品だった。

後半最初は、横山和也（1986年生）のクラリネットとアンサンブルのためのソナタ。第1クラリネットと2つのヴァイオリンが第1グループ、第2クラリネットとピアノが第2グループと位置づけられ、空間的な配置も工夫されていたが、2本のクラリネットがもう少し効果的に使われたら、さらに映えたのではないだろうか。

坂田直樹（1981生）の《私は、私がこの風を知っていることに気づく》は、武満作品を連想されるようなタイトル。フルート、サクソフーン、アコーディオン、ハープ、ヴァイオリン、チェロとい



第3位 江原大介

う編成で、特殊奏法を含め、短い持続のモチイーフが積み重なっていく作品。アコーディオンの使用が音響に適切なメリハリをもたらしていたと思われる。

最後に演奏されたのが、魚路恭子の《Apple Core》。フルート、ハープ、打楽器2名、女声、ヴァイオリンという編成で、5つの部分から成り、女声が聖書から引用の英語テキストを歌う。各楽器の対話と言葉のアクセントや引き延ばしなどの変化をつけた女声の書法が興味深いもので、歌詞のもたらす少々ミステリアスな感触が巧みに表現されていた。

結果は、第1位が魚路、第2位が藪田、第3位が江原。聴衆賞は魚路が受賞した。上位3人はいずれも音楽を巧みに組み立てていく構成力を持ち、実力のある若手だと言えよう。魚路は言葉の扱いにも優れ、楽器と声との組み合わせから、斬新な音響を引き出した点が評価されたのではないだろうか。個人的には江原作品にもユニークな魅力を感じたし、藪田作品の完成度の高さも注目できるものだと思われた。